

伝文

日本口承文芸学会 会報

第 76 号 2025 年 2 月 発行

日本口承文芸学会

〒464-8671 愛知県名古屋市中千種区桜が丘 23

愛知淑徳大学交流文化学部・GCC 研究科 藤井真湖研究室

Tel.: 052-781-1151 (内線 686)

E-mail: info@ko-sho.org

昔話はデリケート!?

松本孝三

昭和 46 (1971) 年春、福田晃先生が大谷女子大学 (現・大阪大谷大学) から立命館大学へ来られ、以来 50 年、私は縁あって先生に師事して来た。その先生は令和 4 (2022) 年 1 月 9 日、卒寿を目前に逝去され、今もなお、折に触れて精神的な空洞を感じる日々である。

福田先生に従って初めて昔話調査に赴いたのが徳島県海部 (かいふ) 郡海南町 (現・海陽町) である。それは前任校の学生たちとの合同調査であった。女子大の後任は岩瀬博先生である。私たちは研究会を作ったものの昔話調査は全く未経験だったので、当時、それは過酷な体験であった。案の定、調査地で肝心の昔話が全く聞き出せない。前年まで先生に鍛えられた女子大生の力量に圧倒される毎日。連日の報告会で何ら成果のない私たちの、終いには「ここに昔話はない」という苦し紛れの言い訳に対しても、「昔話はデリケートですから」と彼女たちに一蹴され、口惜し涙にくれたことを今も忘れない。

その後も先生の許でひたすら全国に語り手を求め、報告書を出し、また自分なりに論文を書いて来たのだが、昨今は昔話調査自体の困難さを実感している。では、語り手と共にデリケートな昔話もついには消えて行く運命なのであるか。しかし、昔話の生命力はそんな柔 (やわ) いものではなからう。稲田浩二氏が『昔話は生きている』で力説する通りである。本源的に人間は語ることをその表現手段として持っていたと思う。

ご存じの方も多いと思うが、静岡文化芸術大学の二本松康宏氏が十数年前からゼミの学生たちと浜松市北部山間 (北遠) 地域での昔話調査を継続中で、毎年着実にその成果を報告書として纏めている。そして、私も黄地百合子氏と毎年、調査に出発直前の学生たちを前にゲスト講義をさせていただいているのであるが、若い彼らのこれまでの地道な成果から見えてくるのは、昔話伝承が今もなお、時代に沿いながら脈々と続いており、しかも彼らに昔話を語る人たちの多くが私と同じ戦後生まれか戦後に教育を受けた世代であるということで、そこには従来イメージされてきた伝承の語りとは異なるが、戦後の新たな時代の荒波の中でも彼らがやはりその幼少期から耳にして来た昔話を、伝承の語り手と同様何十年も記憶の底に沈潜させ、今、若い学生たちの求めに応じてその「語り」を蘇らせるのを感じ取ることができるということである。

ところで、ここ数年、私は真下厚氏、黄地百合子氏と 3 人でささやかに研究会を続けており、テーマに応じてゲストの方を交え、また最近では伝承の語りをめぐる、戦前からの昔話の記録・表記方法などの歴史とその変遷を辿りながらそれぞれの立場から議論を重ねてきた。そこから実感するのは、一言で言えば昔話の持つ伝承の力である。私自身、新型コロナ禍以降、自宅で昔話の録音テープを聴き直す機会が増え、以前は気付かなかった昔話の生命力といったものが、当時の懐かしい記憶とともに思い起こされるのである。その意味で、昔話はけっこう強 (したた) かであることを最近では実感している次第である。

(大阪府)

川田順造さんのこと

川田、川田。あなたはあまりにも、わたしに食い込み、食い荒らし、去ってゆく。

わたしにだけではない。

去り行く後ろ姿、川田。見送るわたしには、尋常の言葉が出てこない。

民族学者。

川田とはついに一語も、レヴィ＝ストロースについて、話さなかった。

わたしにレヴィ＝ストロースは、川田が邪魔で、面倒な川田。

日本の古代をまったくの無知蒙昧で押し通した川田。

サバンナ、アフリカ。

さようならを言わないよ、アフリカ。

そして川田。

（藤井貞和さんからのメール、2025年1月21日受信）

昨年12月20日に亡くなった川田順造さん（1934年－2024年）の研究の形を顧みたい。

まず川田順造さんの研究のスタイルとして挙げられるのは「文化の三角測量」だ。昨年12月20日に亡くなり、新聞社等の訃報でも川田さんを「文化の三角測量」提唱者と多くが伝えていた。川田さんの『西の風・南の風』（1992）に代表されるアフリカ・ヨーロッパ・日本の三箇所をフィールドとし、互いの文化を参照しあいながらそれぞれの社会や文化の特質を浮かび上がらせる方法だ。これは同年に出た佐藤郁哉氏の『フィールドワーク 書を持って街へ出よう』での「トライ・アンギュレーション」の主張とも響きあうと私は考える。川田さんの「文化の三角測量」を〈空間〉のものとして読み取るだけでなく〈方法〉や〈対象〉等の三角測量としても展開させていくことができるはずだ（J・L・オースティンの説く言語行為論での「情報伝達性／行為遂行性」に川田さんが「演戯性」を加えたのは、言語行為という対象にむけての三角測量の実践だと考える（「はなしの演戯性」『口承文芸研究』11号、1988年。関敬吾先生米寿記念のシンポジウム「落語と口承文芸」の記録であり、川田の録音の文字起こしは高木が担当した））。

次に川田さんの方法の特色は口頭伝承を扱うときも音声だけに頼らず、視覚等をも利用して理解し説明する方法を用いたことだ。たとえば『聲』（1988年）では「聲」の文化を説くために聲にどのような種類がありその異なる聲同士がどのような関係を結んでいるかを図示する。その作図の巧みさを忘れてはならない。川田さんに民俗学者・坪井洋文との思い出を記した「坪井洋文さんのこと」（『季刊東北学』18、2009年）がある。坪井は「坪井曼陀羅」など図式化が得意だったが、負けず劣らず川田さんも分析対象を分かりやすく図式化して読者に提示するそのみごとに唸られることが多かった。

さらに川田さんの文章には自己言及が多い。川田さんの論文はいわゆる論文らしくない。調査対象を自己と切り離して客体視せず、自己と対峙させつつもじぶんの行動や思いを文章に刻み込むスタイルを貫いた。それはC・レヴィ＝ストロースや柳田國男の文章スタイルを思い出させる。加藤周一は森鷗外『澁江抽斎』に代表される「書く者」の調べる物語と「書かれる者」の物語とが小説空間に同時に現される様式を、日本人の手になる近代以降の新しい文学様式だと説いた。これは文化人類学・民俗学と文学との関わりを考えさせる。川田さんは柳田國男「清光館哀史」の地にフィールドワークを行ない、清光館がよそから入り込んだ新参者の建てた新しい家屋であり、鯉節生産を試みたが失敗し、その燻煙のために柱が黒ずみ古びて見えた経緯を明らかにした。そこにじぶんと町の人々との遣り取りや、じぶんの感想をも刻み込んだ。川田さんは柳田を批判しつつも、その実文章様式は柳田の「清光館哀史」と深く交わっていた（「旅人の目がとらえるもの」

『人類学的認識論のために』(2004年)。

川田さんを川田さんと呼ぶのは、これが最後だろうか。深沢七郎は敬愛した正宗白鳥の死に際して「白鳥の死」を著した。深沢は生あるときには敬称をつけるが、死後には名前そのものが価値を持つゆえに敬称は不要になると説いた。川田さんはこれから川田順造になるのだろうか。だがこれは別れではない。我々に言う/祝う/忌む/呼ぶ/読む/搔く/書く/話す/喋る/語る/騙る/歌う/訴う/聴く/聞く/問う/訪う/唱う/説く等々言葉の暮らしある限り。



1988年6月 シンポジウム「うたとかたり」 司会:川田順造さん (パネリスト高木の発表中) (於・島根大学)

第86回研究例会報告 2024年11月30日(土) ZOOMにて **シンポジウム「大人が聞く「むかしばなし」—地域の中で「むかしばなし」はどのように伝えられていくのか—」報告**

和久津安史(埼玉県)

2024年11月30日(土) オンライン形式により、日本口承文芸学会第86回研究例会が「大人が聞く「むかしばなし」—地域の中で「むかしばなし」はどのように伝えられていくのか—」とのテーマで開催された。

パネリストとしてNPO法人全国語りネットワーク理事長の井上幸弘、みやぎ民話の会代表の島津信子を招き、本会会員の前日本民話の会会長、岡山民俗学会名誉会長、岡山語りのネットワーク名誉会長である立石憲利、本会会員の市川民話の会で事務局を行っている根岸英之、司会は研究例会委員の和久津安史が行った。

根岸が、「市川民話の会の取り組みから」と題して、会員アンケートにより大人を対象に語る場合にどのような特質がみられるかを明らかにした。市川の民話を古老から聴き取り次世代に継承していくことを目的としている会の活動を通して、大人への民話の伝え方や会の「むかしばなし」伝承の特色などを述べた。

立石が「民話採訪して約七十年」と題して、長年にわたり、伝承の話を聞き歩き、資料集、再話集、絵本など多くの出版をしていること。「立石おじさんの語りの学校」「語りの指導者養成

講座」などで行っている語り手の養成について、「むかしばなし」の語りへの導入の前触れや語りと語りの間の繋ぎの話の大切さや、語り方は舞台上で語るような演劇性の高い語り方ではなく、年寄りの人が語ってくれた語り方を学んでいるなど具体的な事例を交えて言及した。

島津が「みやぎ民話の会の歩みと課題」と題して、みやぎ民話の会は、民話の採訪、記録、伝承を基本に活動してきたこと、聞き手が語り手の思いに共感して話を聞くことや、語り手に信頼されることの重要性を語った。伝承の語り手の話を直接聞いてもらう「みやぎ民話の学校」を開いてきたが、2011年の東日本大震災の時に、小野和子さんの「この震災を語り継ぐために今やらないでどうする」との考えに共感し、被災地の南三陸町で大震災を語る民話の学校を開催したことなどを述べた。

井上が「ききみみの会」と「全日本語りネットワーク」の活動」と題して、「ききみみの会」の「ブナの森のお話交流会」や「全日本語りネットワーク」での「全日本語りの祭り」など語り手の交流活動について言及した。「全日本語りの祭り」では、紙芝居と語りのコラボレーションが起きていることを述べた。

ディスカッションでは、根岸が「かつての伝承の語り手は聞き手から承認されていたこと。現代の語り手である我々も地域のお話を伝えていく存在として自覚し、周囲の人からも認知されている。これは、現代社会の中で、かつての伝承の語り手の役割をしている」との意見を出した。現代の語り手と伝承の語り手とに分けるのではなく、現代の語り手は伝承の語り手の変容と考えることや、「むかしばなし」の聞き手などの語りの場や語り手の変容などによる語りの変化する部分、不変の部分についての議論がなされた。

特集：各地の語り・語り手・語りの場の紹介

川西昔ばなしの会の活動と小学校での昔話の語り

関根綾子（東京都）

川西昔ばなしの会の発足と活動

川西昔ばなしの会は、山形県東置賜郡川西町で2009年8月に発足した会である。川西町文化財保護協会の事業で埋蔵文化資料財展示館のロビーに囲炉裏を作り、語りをしたのがきっかけである。初代会長は斉藤昭男さん、二代目が小林幸子さん（現在は顧問）、三代目が齋藤はる美さん、四代目が佐藤知恵子さん、現在は鈴木ゆり子さんが会長を務めている。現在の会員数は11人。川西町だけではなく、近隣の南陽市や飯豊町在住の会員もいる。



定例会（2019年11月 川西町浴浴センターまどか）

主な活動は定例会である。1月と2月を除く、毎月第1金曜日に川西町浴浴センターまどかの無料休憩室で開催している。会員が休憩室で昔話や伝説を語る。新型コロナウイルスが流行していた時期は、川西町農村環境改善セ

ンターで観客を入れずに会員だけで語った。また、地元の団体からの要請で語り手を派遣している。主な派遣先は地元の小学校と高齢者向けのゆうゆう大学である。昔話や伝説を語ったり、わらべ唄を歌ったりしている。そして、実地研修として、「川西まちめぐりむかしばなしMAP」掲載の地元の昔話や伝説にゆかりの土地を訪れることもしている。また、年に一回開催される「おきたま語りフェスティバル」にも参加している。この催しは、米沢市や南陽市、高畠町など、置賜地域の語りの会 10 団体で行っている。各団体で選出された語り手 1 名と語りの会で指導している子どもの語り手が昔話を発表しあう。ここでは語り手同士の交流もあるそうである。

昔話の覚え方と語り方



川西まちめぐりむかしばなしMAP

小学校での語り

川西町の小松小学校、犬川小学校、吉島小学校、大塚小学校に、担当する会員 1～2 名が小学校を訪れ、昔話を語ったり、地元の伝説を題材にした紙芝居を見せたりしている。小松小学校では「お話シャワー」、犬川小学校では「わくわくタイム」と名前をつけている。時間は朝の 10 分から 15 分である。全校児童に対してではなく、6 月は 2 年生、7 月は 1 年生のように、学年毎に集まり、語りを聞かせる。低学年は「さるとびっき」や「団子地蔵」のような、話の背景がわからなくても理解しやすい昔話を語ったり、江戸時代に活躍した玉庭出身の力士、小汐山の話を描いた「日本一の力持ち」の紙芝居を見せたりする。中学年では授業で地域のことを勉強するため、地域にまつわる話を選ぶことが多い。高豆蔻（こうずく）の地名由来伝説「菓の枝豆」を語

顧問の小林幸子さんは、『曾孫に語り継いだおよしおばんちゃの昔話十二ヶ月』（日本図書刊行会 2001 年）、『続・曾孫に語り継いだおよしおばんちゃの昔話十二ヶ月』（日本文学館 2003 年）で、小林さんが曾祖母から聞いた話を載せているが、そのほかの会員も幼少期に家庭内で祖母などから昔話を聞いて育っている。

会では幼少期に聞いた話だけではなく、本などから新しい昔話を覚えて語ることもある。その場合は、本に書かれている言葉を一言一句同じように暗記するのではなく、内容は変えないが自分の言葉で語るようにしている。本を読んで覚えるのではなく、本を自分で音読し、録音したものを耳で聞いた方が覚えやすいそうだ。

語る時は、言葉を思い出すのではなく、頭の中で話の場面を思い出しながら語るそうである。そのため、状況に応じて言葉を付け加えたりもする。また、話に登場する場所は、自分の知っている場所をイメージしながら語る。例えば「牛方山姥」の峠の場面では、近所の諏訪峠をイメージしながら語るそうだ。

ったり、小松に伝わる「美女木伝説」の紙芝居を見せたりする。このように聞く児童の学年を考慮して選んでいるが、会としての決まりはなく、担当する会員が語る話を選んでいる。

語り方は大人の時とは違う。大人には自由に語るが、子供に語る時は、方言や現代の子どもにはなじみのないものが登場するため、難しい。ただ、語りの世界に入っているため、わからなくても語っているうちは説明しないそうである。

現在は家庭内での昔話伝承は衰退しているが、子ども達は、学校で昔話を聞いて育つ。今後の昔話の伝承伝播を考える上で、学校で聞いた語りの経験は貴重なものだろう。小学校で昔語りに触れた子ども達が、将来、昔話をどのように継承していくのか、楽しみである。

出版物など

川西昔ばなしの会では、5周年の時
に地元で伝わる昔話や伝説をまとめた
『川西町に語り継がれた民話「むがあし
むがし」』（川西むかしばなしの会
編 自刊 2014年）を出版してい
る。また、会としてではないが、紙芝
居にもなった美女木伝説は『美女の松
記念碑建立記念誌』（美女の松記念碑
建立実行委員会発行 自刊 2022
年）と『美女の松変遷』（小林幸子、
菅美和子編 自刊 2023年）で詳細
にまとめられている。なお、顧問の
小林幸子さんについては、拙稿「曾
祖母から聞いた昔話の文字化―山形
県川西町・小林幸子さんの語り―」

川西昔ばなしの会発足 15 周年記念発表会
「むがあしむがしのつどい」
(2024 年 8 月 川西町農村環境改善センター)

(『昔話―研究と資料』47 号 2019 年) を参照していただきたい。

事務局便り

○受贈書籍 (2024 年 11 月～2025 年 1 月受け入れ)

- ・ 神奈川大学日本常民文化研究所『民具マンスリー』第 57 巻 8 号～9 号 2024 年 11 月～2024 年 12 月
- ・ 日本民俗学会『日本民俗学』第 320 号 日本民俗学会 2024 年 11 月
- ・ 山本廣一『古代日本の謎を解く』ブイツーソリューション発行／星雲社発売 2024 年 11 月
- ・ 神野知恵『旅するカミサマ、迎える人々―伊勢大神楽と「家廻り芸能」』大阪大学出版社 2025 年 1 月

○日本口承文芸学会事務局

〒464-8671 愛知県名古屋市千種区桜が丘 23

愛知淑徳大学交流文化学部・GCC 研究科 藤井真湖研究室

Tel.: 052-781-1151 (内線 686)

E-mail: info@ko-sho.org

日本口承文芸学会を広くご紹介下さい

日本口承文芸学会への入会を希望なさる場合は、事務局にご連絡いただくか、学会HP
(<https://ko-sho.org/>) から入会申込書をダウンロードして、ご記入のうえお送りください。
入会金なし、年会費 4000 円です。郵便振替口座 00180-4-44834 をご利用下さい。